

(別紙1)

【教育研究論文作成上の視点】

本事業では、「学校の実態を踏まえ明日の教育を考える」という立場から、教育に関する実践研究論文を求めています。論文には、①学校の実態・現状を踏まえること、②これからの教育を展望した新しい実践提起・提案があることが大切です。単に実践の事実を整理したものは、「記録」という第一次資料としての価値はあっても、「実践研究」ではありません。「実践研究」であるためには、実践の仮説を設定し、子ども・教職員の変容の事実によってその仮説を検証する「論述」が必要です。「どのような仮説のもとに、どのような実践に取り組み、どのような成果を得たか」を明らかにすることで、その研究成果は他校でも活用できる汎用性をもつものとなり、本県教育の振興に寄与する有益な研究として評価されます。

以下に、教育研究論文作成上の視点を整理しましたので、ご参照ください。

① それぞれの学校の現状と、国や県などの教育の方向性等を踏まえたテーマ設定
なぜ、今そのテーマで実践研究をするのか、テーマ設定の理由が明確であること。そのテーマ設定の理由が学校の現状・実態分析を踏まえて述べられていること。そして、その現状・実態に県下のどの学校にも共通する普遍性があることが望ましい。また、国や県が提起している教育の方向性と重なっていることも重要な視点となる。
② 創造的で挑戦的な教育実践
設定したテーマについて、最新の理論研究の成果に学びながら、新しい実践方略で取り組んだり、これまで実践されてきたものを改善して取り組んだりしたものであることが求められる。先行する実践に学びつつ、その新規性に説得力があり、提案性と汎用性を備えた創造的で挑戦的な教育実践であることが重要である。是非、新しいチャレンジを！
③ 先行実践・研究を踏まえた仮説の設定
目指す実践の成果を導くためにどのように実践すればよいのかを「仮説」として設定する。質の高い仮説とするためには、同じ課題意識を持って取り組んでいる全国の学校・教師の実践や、研究者による理論研究の成果に学んだ上で、自分の学校や子どもたちの実態に合わせた工夫を示すことが重要である。
④ 実践の成果の見える化
仮説は子どもや教師の変容の事実で検証していくため、その事実を客観的に収集する必要がある。いつ、どのように事実を記録・収集するかを計画しておく必要がある。子どもや教師の変容の事実、数字の変化によって示すことができるが、具体的な活動やエピソード、インタビュー記録や本人の作文等も使える。
⑤ 研究論文としての様式
研究論文としての体裁を整えること。研究目的－仮説－実践－事実に基づく仮説の検証といった論理的な文章構成とすること。他者の文章やすでに発表した文章を注釈も付けずに引用するのはルール違反。感想文ではないので「・・・と思います」「・・・ではないだろうか」といった曖昧で主観的な書き方はせず、事実で裏付けしながら、確かなことを客観的な体裁で述べる。 なお、題目も研究目的・仮説を踏まえて焦点化させることが重要。学校の校内研究のテーマをそのまま論文題目にしてはいけない。論文で焦点を当てたところがわかるように、そして、研究のオリジナリティ・新規性＝魅力が伝わるように工夫すること。

(審査委員会委員長 高旗浩志)